
異世界アルバイト！

一城一樹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異世界アルバイト！

【Nコード】

N6013X

【作者名】

一城一樹

【あらすじ】

左文字さもんじ閤太ごうたには借金があった。厳密には、失踪した父親の作った巨額の負債が。残された唯一の家族と自分自身のためアルバイトに精を出す閤太だったが、ある日、勤務先の社長から新しい仕事の誘いを請ける。曰く 日給十万、拘束時間僅か、違法行為一切なし 怪しすぎる誘いだったが、高給の誘惑には抗いがたく、リスクを承知で引き受けることに。そうして連れて行かれた先は、見たこともないもう一つの 世界 で ？

第1話「動機は金銭目的」

最寄り駅から徒歩十五分。剣ヶ峰商会は寂れた商店街の片隅に居を構えている。

左文字さまじり閻太は入り口の横に自転車を止め、剣ヶ峰けんがみね商会が入居する雑居ビルを見上げた。

外観は決して新しくないが、古過ぎるとも言い難い。四階建てのビルのうち、二階が商会の事務所に、一階が倉庫になっている。三階と四階は入居者のいない空き部屋だ。どこの町にもある、さっぱり流行らないテナントビルという奴である。

「さてと……」

閻太は高校指定のブレザー姿のまま、二階へ通じる階段を昇った。社名のプレートを掲げた扉をノックして、返事も待たずに中へ入る。

「失礼します」

二階の事務所は大して広くはない。事務机が二つと応接用のソファアーが一对に、書類を収納する棚が四つほど。たったそれだけでスペースの大半を使いきっている。

建物自体の規模からすると、二階部分の面積は事務所の面積の倍以上ある。残りのスペースは給湯室やら仮眠室やらが占めているらしい。

「やっと来たか、左文字。今日はサボりかと思ったぞ」

女物のスーツをカジュアルに着崩した妙齡の女が、一番奥のデスク

クから声を掛けてきた。

「社長、今日は遅れるって事前に連絡しましたよね？ 無断遅刻扱いで給料減らすとか言わないでくださいよ」

「ははは、冗談に決まってるだろ。それより、社長じゃなくて狐ヶ崎さんと呼べと言っただろう。もう忘れたのか」

狐ヶ崎吉香きつねがさきよしか。剣ヶ峰商会の社長にして閻太の雇用者である。

ウエーブの掛かった茶髪を首筋で括り、やや乱暴な口調で遠慮なく喋るその姿は、女性らしさという概念をどこかに置き忘れてきたかのように思える。

しかし、男性的かといえはそうでもなく、高身長にプロポーションの良さも相成って、黙っていれば充分美人として通じるであろう容貌だ。

剣ヶ峰商会の狐ヶ崎吉香。会社の名前と社長の名字の語呂が妙にいいのを、閻太は少しだけ気に入っていた。

「それはそれとして、個人的にはなるべく遅刻はして欲しくないんだがな。バイトが来ないと仕事が捗らん」

「社長、戯言はそれくらいに。閻太君。これ、倉庫から持ってきて」「あ、はい。分かりました」

もう一つの事務机に座っていた少女が、閻太に書類を手渡した。書類には倉庫から取り出すべき品目の一覧が記されている。

「乱場あ。お前は本当に冗談が通じないな」

狐ヶ崎は雑談を打ち切られて不服そうにしながら、目の前のキーボードを叩き始めた。

乱場那美らんばなみ。閻太はアルバイトとして雇われているので、彼女が剣

ケ峰商会唯一の正社員ということになる。

外見は狐ヶ崎と好対照。体格は小柄で黒いストレートの髪を背中に流している。ころころと表情を変える狐ヶ崎に対し、こちらはいつも仏頂面で、感情がまるで読めない。

年齢は閻太と同じくらいか少し年上だろう。正社員をやっているあたり、高校を卒業して間もない程度なのかもしれない。

「社長も那美さんを見習ってくださいよ」

「何だと？」

「それじゃ、倉庫行ってきます」

閻太は壁に掛かっていた倉庫の鍵を取り、狐ヶ崎の視線から逃れるように、足早に事務室から出て行った。

階段を駆け下り、慣れた手つきで一階のシャッターを開錠。錆び付いて動かしにくくなったシャッターに苦戦しながら、一気に持ち上げる。明かりの消えた倉庫の中には、大きな段ボール箱を納めた棚が規則正しく並べられている。

閻太はブレザーを脱ぎ、壁のフックに引っ掛けた。

「さて、お仕事といきますか」

「左文字閻太。県立稲葉郷いなば高等学校一年。満年齢で十六歳」

狐ヶ崎は頬杖を突いたまま手元の資料を読み上げていく。

閻太が立ち去った事務室には、狐ヶ崎と那美の二人しか残っていない。そして那美はあくまで自分の仕事に没頭しているので、これ

は狐ヶ崎の独り言ということになる。

「家族構成は唯一の肉親と二人暮らし。バイトを希望する理由は『短期間にまとまった金が欲しいから』で、バイト先にうちを選んだ理由は『給料が余所より良かったから』ときた。こつこつ素直さは大好きだよ、ほんと」

柔らかな前髪をくしゃりを掻き揚げる。

端正な唇が笑みを形作る。ただの苦笑か、純粹な笑いか、それとも笑うしかないという意味表示なのかは、狐ヶ崎本人にしか分からない。そもそも唯一の聴衆である那美は、狐ヶ崎の奇行に一切の関心を払っていなかった。

「社長。労働者の個人情報を読する暇があるなら、業務上必要な書類にきちんと目を通してください」

「失礼な。これも業務上必要な行為だ」

那美がキーボードを叩く指を止める。そして睨むように狐ヶ崎へと顔を向けた。

「まさか、彼を 商品 の売り込みにまで連れて行くつもりですか」

那美の顔に初めて表情らしい表情が生まれる。それは驚きのようであり、同時に憤りのようでもあった。

狐ヶ崎は冷たさすら感じさせるほどの無表情で、那美の発言を全面的に肯定する。

「そのまさか、さ。まずは 商品 の引き渡しの手伝いからさせるつもりだな」

「私は反対です。何も知らない子を巻き込むだなんて……危険過ぎ

ます」

「人員の増強は決定事項だ。私達だけでは、もう手が回らないだろう。不服なら誰か代わりを見繕ってこい。そいつが左文字より使い物になるなら考えよう」

狐ヶ崎はそついい残して席を立ち、事務室の扉に向かって歩いていく。その背中を、物言いたげな視線が追いかける。

「まったく……お前も最初は何も知らない子供だっただろうに」

ドアノブに手を掛ける直前、狐ヶ崎が肩越しに振り返る。

「そもそも、この仕事は割り切って貰わないと困る。その点で左文字は適任だ」

「では、彼なら割り切って仕事に望めるとも？」

頑なに懐疑的な態度を崩さない那美を、狐ヶ崎は妙に暖かな眼差しで見やった。まるで、指導に納得しない生徒を見守る教師のように。

「奴は金の為に動かなければならない理由があるからな。手厚く報いてやれば、こちらが望むとおりに動いてくれるさ」

倉庫の蛍光灯がちかちかと明滅する。

閻太は埃臭い床にしゃがみ込んで、大きな段ボール箱の中身を一抱えほどの小振りな木箱に移し変える作業を続けていた。

「えっと、アクリル製品 が二百セットに、 ガラス製品 が百本だったな……」

目の前には段ボール箱二つと木箱が三つ。

アクリル とサインペンで書かれた段ボール箱の中身を一つの木箱に、 ガラス と書かれた段ボール箱の中身を残り二つの木箱に入れていく。

剣ヶ峰商会における閻太の仕事は在庫の出し入れと運搬だ。

力仕事だが、支払われる給料と比較すれば不自然なくらいに割のいい仕事である。

「毎回思うけど、これって誰が何のために買っていくんだろっな」

不審なのは不自然な高給よりも、剣ヶ峰商会が取り扱っている商品のラインナップだ。ここでいう アクリル製品 や ガラス製品 とは剣ヶ峰商会の社内で用いられる俗称であり、世間一般における呼称は別に存在している。

閻太は ガラス製品 の段ボール箱の中を覗き込んだ。

ガラス製品 それは、理科室等でよく見かけるガラス製の試験管であった。

厳密には、つるつるとした口にゴム栓を押し入れて密閉するタイプではなく、キャップ状の蓋で密閉するねじ口試験管と呼ばれる種類だ。その試験管が、積み重ねられる形状の試験管立てに入れられた状態で段ボール箱に詰まっている。

「試験管はまだ分かるんだけど……こっちは何に使うのやら」

閤太はもう一方の段ボール箱から、手の平サイズの紙袋を取り出した。この小さな袋の中に アクリル製品 が一セット梱包されているのである。

折り畳まれた紙袋の口を開き、中身を手の上に出してみる。アクリル板が二枚と細長い金具が四つ。アクリル板はどちらもとレーディングカードゲームのカードくらいのサイズで、一方は縁に出っ張りが、もう一方はその出っ張りに対応する溝が設けられている。

この二つを合わせれば、パチンという小気味いい音を立ててくっ付くに違いない。

「金具は縁取りかな」

四つの金具は二種類の大きさに別れ、それぞれアクリル板の長辺と短辺と同じ程度の長さになっていた。アクリル板を嵌め合わせた後で、これらの金具で縁を固定するという加工手順なのだろう。

組み立て方は分かるが、用途はさっぱり分からない。

閤太は暫く考えてみてから、使い方を推測するのを諦めて、商品を紙袋に戻して木箱に放り込んだ。

二つの段ボール箱の中身を必要数だけ取り出して、三つの木箱に移し変える 頼まれた仕事は極めて簡単。中身の使い道さえ考えなければ、特に頭を悩ませる要素はない。

「ま、使い方なんて考えるだけ無駄か。俺には関係ないしな」
「そう言うな。こいつが完成品だ」

背後で狐ヶ崎の声がする。驚いて振り返ると、厚みのある板状の物体を投げつけられた。

閤太は慌ててそれを受け止め、狐ヶ崎の方へ顔を向ける。

「いきなり何するんですか！」

「悪いな、驚かせたか？ 今渡したのが アクリル製品 の完成品 だと言ったんだ。興味があるなら良く見てみる」

そう言われて、閻太は投げ寄越された板状の物体を確かめてみた。大枠では想像どおりの形をしていた。二種類のアクリル板を組み合わせ、金属の枠で縁取りして、気密性と強度を高めている。厚みは五ミリ程度だろうか。

唯一想像と違ったのは、その『中身』であった。

アクリル板の狭間に、赤い宝石の粉末や破片のような物質がみっしりと詰まっている。

蛍光灯の光を弾いて不規則に輝く様は、アクセサリーの類まるでに興味を持たない閻太ですら、素直に綺麗だという感想を抱いてしまふほどだった。

「左文字。お前、まとまった額の金が必要らしいな」

狐ヶ崎が倉庫の棚にもたれ掛かる。

閻太は赤い板から目を離し、深いそくに眉を顰めた。

「そうですね。だからこうやって働いてるんじゃないですか」

作業を再開し黙々と二個の木箱をいっぱいにしていく。狐ヶ崎は閻太の仕事が一段落つくのを見計らい、再び挑発的な態度で口を開いた。

「失踪した父親が実兄に お前から見た伯父に借りていた負債、五百万だったか。親のしたことだと開き直ってしまえばいいのに、

律儀に返そうとするとはな」

閻太は狐ヶ崎のことを無言で一瞥するだけで、発言に対しては否定も肯定もしなかった。

社長だろうと誰だろうと、あの話題を持ち出されるのは不愉快だ。

あんな父親のことを思い出してしまうから。

この場に存在しない人間への悪態が喉元までせり上がる。

それに、まとまった金が必要なのは、あんな父親の尻拭いをするためだけではない。もっと大切な、何物にも変えがたい理由がある。

「おいおい、そんな怖い目で見てくれるな。律儀で宜しいと褒めてるつもりなんだ。しかし、利子の勘定は止めてもらっているみたいだが、こんなアルバイトだけでは何年掛かるか分かったもんじゃないぞ」

「……それで、何が言いたいんですか」

狐ヶ崎は口の端をくつと上げた。笑っているのだ。

「お前が望むなら、今の何倍も稼げる仕事を割り振ってやってもいい。条件は秘密厳守。そういう仕事が存在することすら、決して他言しないこと。給料は……そうだな、手当込みで日給十万でどうだ。もちろん支払いは日本円だ」

閻太は思わず目を丸くした。

破格。規格外。非常識。様々な表現が脳裏を駆け巡る。

ここのアルバイトは他と比べて高給だが、それは時給だけを比べた場合の話だ。高校に通う時間等を確保しようとすると労働時間を

あまり長く取れない。そのため、日給に換算すれば極端に飛び抜けているわけではなかった。

狐ヶ崎が提示した日給十万というのは、普段の日給の十倍から十数倍に相当する。

だが、すぐにでもイエスと返答したい欲求と同時に、底知れぬ不安が湧き上がってくる。

一日で十万も支払われる仕事が真つ当な内容であるわけがない。相応のリスクが存在するに決まっている。例えば 犯罪行為

「その顔、ずいぶん悩んでいるみたいだな」

閻太の不安を見抜いたのか、狐ヶ崎が条件に補足を加える。

「先に明言しておこう。この仕事は日本の法律に一切抵触しない。それどころか、地球上の如何なる国家の法にも触れないと断言できる。リスクがあるとすれば不慮の事故、歩道に暴走自動車が突っ込んできたり、北海道で熊に襲われるような不運な出来事くらいだよ」

ますます都合のいい条件ではないか。あまりに好条件過ぎて、逆に不信感を煽られてしまうくらいである。

この仕事には間違いなくリスクがある。むしろノーリスクだと考えるほうが不自然だ。

しかし、日給十万という魅力には抗いがたい。

閻太はたっぷり十数秒悩んでから、どうしても確認しておきたいことを訊ねてみた。

「一日あたりの労働時間はどうなるんでしょうか。万が一、丸一日拘束されるような仕事なら請けられません」

「何、トラブルがなければ二時間もあれば終わる仕事さ」

狐ヶ崎は柵から離れ、閻太の正面に立った。

「私と乱場がやっている。商品の売り込みと引き渡しを手伝ってくれたらいい。まあ、当面は荷物持ちのようなものだ」

この日、閻太は二階事務所の奥の部屋を初めて訪れた。

窓がない。板か何かで無理やり隠しているのではなく、改築工事によって完全に排してしまっているようだ。

電灯の土台は天井に備え付けられているが、肝心の蛍光灯が埋められていない。

それらの要因が重なって、この部屋は非常に薄暗くなっていた。光源は事務所に通じる扉から差し込む蛍光灯の光だけだ。

「……社長。本当にこうやって運ばないといけないんですか？ 荷台なり猫車なり使えばいいでしょう」

閻太は困惑を隠しきれずに愚痴を溢した。

困惑の原因は現状の格好と荷物の運び方である。

先ほど倉庫で用意した三つの木箱を、まるで御堂を背負う山伏が大荷物を運ぶ登山家のように、全部まとめて背負わされているのだ。

「行き先は道路事情が良くないんだ。振動で商品に傷がついたら大変だろう。普段は乱場が背負っているんだから、お前にもやれるさ」
「え、徒歩で移動するんですか？」

目的地には自動車か何かで移動するものだと思いついていた。二時間で済む仕事なのに徒歩移動ということは、よほど近場の仕事ということだろう。遠く見積もっても片道五キロ。それ以上は二時間以内に往復することが難しくなる。

「というか、どうして一階の倉庫にあった荷物を、わざわざ二階まで持って上がらないといけなかったんですか」

「じきに分かる。……そうだ、念のためこいつも持っておけ」

狐ヶ崎は長方形の大きなケースを闇太に押し付けた。長さはメートル程で、バイオリン用ケースを長方形に形成したような雰囲気だ。

「また荷物か……しかもやけに重い……」

「もしも身の危険を感じたらその箱を開ける。使い方は中に入れてある」

使い方ということは何らかの道具なのだろうか。詳細を問い質す間もなく、那美が事務所に通じる扉を閉めた。

部屋が闇に包まれる。

とはいえ完全な暗闇ではなく、隙間から差し込む僅かな光のお陰で、周囲の様子をおぼろげながらに見ることができた。

「え、何で扉を……」

「いいから。もう少し中央に寄れ」

言われるままに部屋の中央へ移動する。床には浅い溝のようなへこみが幾つもあり、躓かないように歩くだけでも一苦労だった。

「転移式を起動させます」

那美がすぐ隣で意味不明のことを口走り、ポケットから何かを取り出した。

白く発光する液体らしきものが注がれた　ガラス製品　と同型のねじ口試験管だ。

戸惑う閻太のことなど気にも留めず、那美は試験管のキャップを取り、淡く発光する内容物を床に垂らす。

まるで蜂蜜のように、白い液体が床のへこみに滴り落ちる。

次の瞬間、床一面が目も眩まんばかりの光を放った。

「うわっ……！」

溝だ！

怜次は麻痺していく視力で発光の正体を悟った。

白い液体が瞬く間に床の溝の隅々まで行き渡り、曲線から成る複雑で幾何学的な文様を眩く輝かせているのだ。

あの溝はへこみなどではなかった。まるでオカルト的な魔法陣のような

「　着いたぞ」

狐ヶ崎の落ち着いた声に誘われ、閻太はきつく閉じていた目蓋を開いた。

だが、床の発光現象とは異なる眩しさに目を刺激され、再び薄目になってしまう。

今まで暗い場所にいたのに、いきなり太陽の光に晒されては、暗

所に慣れた視覚が耐えられない。

「……太陽だつて？」

閻太はハツと顔を上げた。

陽の光を拒んでいた薄暗い部屋はどこにもない。目の前に広がっているのは、澄み渡る蒼穹と荒涼たる草原。そして、なだらかな斜面の下に見える、石垣に挟まれた小道を有する小規模な集落。

どの要素を取っても、日本という国に存在しうる光景ではない。

まばらに建つ家々は石造りと木造りの複合で、日本はおろかヨーロッパあたりの建築様式ともまるで似ていない。

これは夢か。むしろ床が光り輝いたところから幻を見ているのではないか。

可能ならそう思い込んでしまいたかった。

しかし、頬を撫でる風の冷たさや、足の周りに生い茂る草木の感触は、閻太の現実感を容赦なく刺激している。

こんなに確かな感覚を味わっておきながら、現実逃避などできるわけがない。

「できることなら……君は関わらずにいて欲しかった」

すぐ隣で那美の溢した呟きは、物悲しげな響きを帯びていた。

閻太は相槌一つ返すこともできずに、ただ呆然としていることしかできなかつた。

そんな感傷に興味はないと言わんばかりに、狐ヶ崎が嬉々として眼下の光景を指し示す。

「ようこそ、左文字閻太。もう一つの世界へ！」

「もう一つの世界……？」

ただ、呆然と。閻太には風景の美しさを認識する余裕すらなく。肩に掛かる荷の重さだけが、現実との繋がりを保ってくれているかのようにあった。

第2話「邂逅は緊急事態」

土を押し固めて舗装された小道を歩いていく。

先頭に行くのは狐ヶ崎で、最後尾には那美。閻太は二人に挟まれて流されるように歩き続けていた。

小道はひどく見通しが悪い。

両端を人の背丈ほどの石垣に塞がれ、左右になだらかな蛇行を続けているため、十メートルも視界が開けていない。

表現を変えれば、地面に掘られた蛇行路を土と石垣で補強したものであるところか。

まるで塹壕だ。閻太はそんな感想を抱いた。

「左文字。こいつを服用しておけ」

唐突に狐ヶ崎が振り返り、布製の小袋を手渡してくる。

軽く握ってみると、大粒の固形物が詰まっているような手触りでした。

この固さに、服用という表現。錠剤 だろうか。

そう考えて袋を開ける。袋の中には予想どおりのものが入っていた。大粒のラムネ菓子のような薄黄色の錠剤。それもパツと見ただけでは数え切れないほどの数である。

「用量は一度に一粒だ。それ以上は服用するな」

狐ヶ崎は懐からもう一つ袋を取り出して、錠剤を自分の口に放り込んだ。ごり、と奥歯で噛み砕く音がする。

振り返ると、那美も錠剤を口に含み、頬の中でころころと転がしているところだった。不機嫌そうな無表情なのに、飴でも食べるよな食べ方をしているので、ミスマッチに思えて仕方がない。

「……なにか？」
「なんでもないです……」

閻太は狐ヶ崎に倣って錠剤を噛み砕いた。錠剤は無味無臭で、ラムネと同様にあっさり唾液に溶けていく。しかし消えてなくなっただけではなく、濃厚なスープのように、とろりとした舌触りの液体に変わったただけだ。

無味無臭で食感だけがあるというのは、正直に言っただけで薄気味が悪い。

閻太は味気ない薬剤を嚙下して、疲労感の籠った溜息を吐いた。

歩き始めてからまだ十分と経っていないが、丸一日歩いた気がするくらいに消耗していた。背中に木箱を三つも背負い、やたらと重たいケースを抱えたまま、先の見えない道をひたすら進み続けるのは、精神的にも肉体的にも苦行と言っしかない。

「……訳わかんねえよ……ほんと」

狐ヶ崎と那美に聞こえない声量でぼつりと呟く。

高給に釣られて、多少のリスクなら負っても構わないとは思ったが、こんなことになるなど想定していない。事前に想定できたとしたら、そいつは間違いなく予知能力者だ。

そもそも、閻太はまだ何の説明も受けていなかった。

ここが何処なのか。世界とは何のことなのか。そんな根本的な説明どころか、現地における地名すら教えられていない上、何処の誰に商品を届けるのかも分からない。

「けど、今は言われるとおりにするしかないよな……」

見ず知らずの土地に　それも地球上かどうかも怪しいというふざけた場所だ　に連れてこられたとき、頼ることができずのは現地のことを知っている人間だけだ。

たとえ、それが自分をここに連れてきた張本人だとしても。

これがもしも、意に沿わず連れ去られた被害者という立場なら、文句や呪いの一つや二つはぶつける権利があるかもしれない。しかし、閻太の場合は金銭目的で釣られたわけだから、自業自得と言われても仕方がないだろう。

実際、閻太は自分自身でもそう思っていたので、こうして狐ヶ崎の後に続いて歩いているのであった。

「社長……こんなところに客がいるんですか？」

丘の上から見た限りでは、この付近には小さな集落しか見当たらなかった。

あんな辺鄙な場所で、試験管やアクリル板をどんな風に使うつもりなのだろう。

「目的地に行けば分かる。……ほら、もうすぐ着くぞ」

石垣が少しずつ低くなっていく。

正確には小道が上り坂になっていて、地表の高さに近付いているのだ。

地表へ出たところで狐ヶ崎が足を止める。

「ここが今回の届け先だ」

「……うわあ」

閻太は思わず感嘆の声を漏らした。

見上げるほど大きな木製の門が聳え立っている。閻太は木材について詳しいわけではなかったが、黒ずみ年季の入った表面は堅牢な印象を見るものに与えてやまない。

単なる内部と外部を遮断する仕切りではなく、頑なに侵入者を拒む障壁としての門。

前に立っただけで押し潰されそうな気持ちになってしまう。

丘の上から集落を見たときは、斜め上からの視点だったので、家々を取り囲む門や壁の存在が印象に残りにくかったのだろう。

「城門、ですか……？」

「村の門だ。いや、町といえるくらいの大きさはあるかな」

狐ヶ崎は閻太の背負う木箱を軽く叩き、閻太と那美に指示を出した。

「とりあえず、木箱はもう降ろしていいぞ。乱場は私と来い。左文字は適当に時間を潰している。中に入る手続きに時間が掛かる」

言われるまま、閻太は背負っていた木箱を地面に置いた。

肩に掛かっていた重量が消え、一気に気持ちと身体が楽になる。

しばらく振りの開放感に浸っていると、那美が真剣な面持ちで近付いてきた。

「閻太君。私は社長と手続きをしに行くから、門の近くから離れないで」

「分かってますよ。下手に動き回って迷子になるなんて、死んでもごめんですから」

「そうじゃなくて……えっと、確かにその理由もあるんだけど……」

那美は言いよどみ、言葉を詰まらせる。

だが、はぐれてしまうこと以外に懸念材料があるというのは察することができる。

そういえば 閤太は狐ヶ崎の発言を思い出す。狐ヶ崎は、この仕事に付随するリスクとして、北海道で熊に襲われるような不運はありうると言っていた。

見たところ、周辺は草原が広がる自然豊かな風景だ。その手の動物が住んでいても不思議はない。

「乱場、早くしろ。商品も持って来い」

「は、はい！」

狐ヶ崎に呼ばれて、那美は木箱を担ぎ上げて早足で走り去った。独り残された閤太は、手持ち無沙汰に辺りを見渡した。

「何が何だか分かんないけど、案外悪くない場所みたいだな」

限りなく広がる草原に、地平線の向こうにそそり立つ山々。

アスファルト舗装された道路とも、空中を無作法に横切る電線とも無縁な、ありのままの自然が広がっている。

吹き抜ける風にも排気ガスの臭いなど混ざってはいない。

快適だ。閤太は素直にそう感じていた。

「けど、どうしてこんなになってるんだろっな……」

自然に満ち溢れた風景の中で、この村の 或いは町の周辺だけは異様な雰囲気包まれていた。

土地をぐるりと囲う塀は、堅牢な門と同等かそれ以上に分厚く、まるで城壁のようだ。詳細に表現するなら、高々と築き上げられた木製の柵の下から三分の二ほどまでを、歪な仕上りの石垣が覆っている。

もう一つの異様さの原因は、ここに来るときに通った小道の存在だった。

地面を深く掘り、両側を石垣で固めた狭い小道。それと同じ構造の道が何本も張り巡らされて、町の周囲を幾重にも覆っているのだ。直線的な道は殆どなく、外部から道を使って町を訪れるには、曲がりくねった複雑な経路を通らなければならなくなっている。

「これじゃ、まるで迷路じゃないか」

閻太は正直な感想を口にした。

要塞じみた壁といい、塹壕のような道といい、余所者が入り込むことを徹底的に拒んでいるとしか思えない。

「……ん？」

ふと、閻太は塹壕道　　内心でそう呼ぶと決めた　　を挟んだ向こう側に目をやった。

「誰かいるのか……」

地面から突き出した大岩の上に人影が見えた。

背はあまり高くない。子供なのだろうか。見たところ、長い髪が風になびいているようなので、きっと少女に違いない。

閻太は長方形のケースを足元に置き、少女の姿をぼつと眺めていた。

地元の人間を目撃したのは、ここに連れて来られてから初めての

ことだった。

もしかしたら人間がいないのでは、とも考え始めていたので、人の姿を見つけただけで安心してしまっ。

知らず知らずのうちに、少女の目前まで近付いていく。

門の近くから離れるなど言い含められているものの、好奇心を完全に抑え切ることはできない。少し移動するくらいなら大丈夫だろう。自分にそう言い聞かせ、塹壕道の縁までゆっくり歩を進めていく。

「何をやってるんだろ」

最初、岩に座って風景でも眺めていると思ったが、どうやら違らしい。少女は周囲に注意を払うこともなく、岩肌を膝を突いて足元に視線を落としている。

少女の服装は閻太達とは全くの異質であった。

遠目に見ただけではワンピースと見間違えてしまったかもしれない。

あえて日本の服飾に喩えるなら、腰から下がスカートのように膨らんでいる浴衣といったところだろうか。

袖は浴衣よりずっと長く、袖口はまるで袋のようだ。厚手の布を素材として作られているようで、色も薄めの単色で装飾的な染め方はされていない。帯は和服と違って柔らかい布を巻きつけている形式らしい。

いずれにせよ、裾と袖がやたらと長いせいで手足がよく見え、何をしているのかはさっぱり確認できなかった。

「ああいうのがここの服なのか」

閻太は自分が着ている服に視線を落とした。

ブレザーを脱いだままなので、ワイシャツにスラックスという軽

装だったが、この住人から見たらどういふ感じなのだろうか。手
続きをしに行った狐ヶ崎と那美も似たような服装なので、そこまで
違和感は与えないのかもしれない。

そんなことを考えながら、塹壕道の縁に差し掛かったときだった。

「うわっ！」

石垣の上端で足を滑らせかけ、危うく落ちそうになってしまう。
声を上げてしまったことを後悔したが、もう既に手遅れだ。

「誰っ！」

少女が驚いた様子でこちらへ振り返った。

淡い琥珀色の瞳が閻太を見据える。閻太は近付いていたことに気
付かれたことより、少女が日本語を喋ったことに「#」日本語を喋
ったことに「」に傍点」驚いて、思わず言葉を詰まらせる。

次の瞬間、地面が突如として鳴動し始めた。

「しまった！」

「うわっ、地震……！」

違う、地震ではない。振動は地面の真下から襲い掛かってきてい
る。

石垣の隙間から土が零れ落ち、町を囲む塀が小刻みに震える。

早くここから逃げなければ。直感はそのように告げているのだが、振動
に足を取られないようにするだけで精一杯だ。

「その人、早く逃げて！」

少女が叫ぶ。

閻太は少女の方へ振り返り　大岩が地面を突き破って飛び出すのを目撃した。

「……！」

莫大な量の土砂を撒き散らしながら、それはゆっくりと身を起こしていく。

岩石で出来た巨大なヒトガタ。石柱のような腕を地面に突き立て、比較的小さな脚と合わせて巨体を支える姿は、密林の大猩猩ゴリラを思わせる。

地表に露わになっていた大岩は、あれの頭頂部だったのだ。

「冗談……だろ？」

身体が本能的に後ずさる。顔が引きつってまともな表情を作れない。大抵の出来事には動揺しまいと思っていたが、いくらなんでも常軌を逸し過ぎている。

岩の巨人が頭のない上半身を動かす。見上げるほどの巨体を構成する岩の隙間から、大量の土が零れ落ちた。

比較対象になるものがないので、巨人の正確な大きさは分からない。

大雑把に目算すれば十メートル以上はあるだろうか。

「……って、こっち来てるじゃねーか！」

岩の巨人は両腕と両脚を使い、大猩猩ゴリラさながらのナックルウォーキングで閻太に向かい　否、町を囲む城壁目掛けて動き始めた。

まさしく岩山が迫り来るかのような圧迫感。

一歩進むごとに地面が揺れ、腹の底から恐怖心が沸き起こる。

「逃げないと……」

だが、どこへ逃げるのか。

町の周囲は迷路のような塹壕道で、上手く抜けられたとしても、見知らぬ 世界 が広がっているだけだ。

「そつだ、城門まで逃げれば何とか……！」

閻太の脳裏に狐ヶ崎と那美のことが思い浮かぶ。

一目散に駆け出そうとした直後、岩の巨人が凄まじい轟音を立てて地面に沈んでいった。

「うわっ！」

揺れ動く地面に足を取られ、危うく転びそうになって立ち止まる。岩の巨人は片脚を地面にめり込ませ、前腕を振り回しながらもがいていた。

塹壕道だ 巨人は迷路のように張り巡らされた溝状の道に脚を突っ込んで、前に進むことができなくなっているのだ。

「助かった……のか？」

「あれだけでは文字通りの足止めにしかりません。早く逃げてください」

どこからか少女の声がする。閻太は慌てて周囲を見渡した。岩の巨人が現れたとき、その頭の上に乗っていた少女は、なすすべもなく放り出されたように見えた。果たして、彼女は無事だったのだろうか。今更ながらそんなことが気に掛かる。

閻太が少女を見つけられずに焦っていると、目の前にあの少女が

舞い降りた《…………》。

「え？」

それは、岩の巨人よりも遙かに現実離れた光景だった。

少女の服の幅広な袖からは、腕ではなく『翼』が生えていたのだ。ちょうど人間でいう肘の辺りを基点に翼へ変貌しているらしく、羽根の先が地面につきそうになっていた。

「あのっ、聞いていますか？　ここは危険ですから、早く町の中に退避してください！　……あ、もしかして言葉が通じてないのかな」

「閻太は目の前の存在が信じられず、ただただ呆然とすることしかできなかった。

自分より頭一つ分は背の低い少女が、頭髮と同じ焦げ茶色の翼を振って、ここから逃げるよう身振りで訴えているなど、果たして誰が受け入れられるのか。岩の巨人も大概だが、有翼の少女などと比べれば他愛ない。

さっきまで気付かなかったが、少女の顔の側面、普通なら耳があるべきところに小さな翼が付いている。勿論、単なる羽毛の塊がそっ見えるだけという可能性もあるが、ひょっとしたらそれが彼女の『耳』なのかもしれない。

どちらが正しいのか判断できる冷静さは、今の閻太には存在しなかった。

「もう！　早くしないとアイツが……」

岩の巨人が太い両腕を支えにして、塹壕道から片脚を引き抜く。少女は琥珀色の目を悔しそうに細めた。

「こうなったら、私がやるしか！」

右翼が袖口の辺りで折り畳まれ、袖の下部の切れ込みから内側に収まっていく。そして、翼を折り畳む関節付近の羽毛を掻き分けて、硬質の指が現れた。人間の指を鳥類の足に似せて作り変えたかのような、鋭い爪を生やした指である。

少女の服の袖は完全には縫い合わされておらず、下部分が腋のところまで切り離されているようだ。袖全体が大きな袋状になっているのも、畳んだ翼を収納するためののだろう。

翼を伸ばせば足元に達するほどの長さ。

翼を畳めば人間の腕と同程度の長さ。

袖の中に翼が隠れていたの、最初に見たときは分からなかったのだ。

「構成属性は 土 …… 違う、派生属性の 岩 かな。駆動部分は 樹 だから…… 火 なら動きを止められるかも……！」

少女はしきりに何事か呟いたかと思うと、爪の生えた硬質の指で、腰帯に差していた筒状の物を器用に抜き取った。

ガラス製の表面を通して、赤い内容物が陽光を弾く。指ほどの太さで、片端だけが口を開けている中空の筒。閻太はその名前を知っていた。

「試験管!？」

「えっ」

少女が驚愕の表情で振り返る。

「あなた、言葉が分かるの《……………》!?」

岩の巨人がもう一方の足を塹壕道から引き抜く。これでもう、岩の巨人と城壁の間に障害物は存在しない。

少女は閻太から目線を離し、絶望的なまでに巨大な岩塊と対峙する。

親指　だと思われる太い指　で試験管のキャップをねじ開け、目の前で内容物を撒き散らした。宝石の破片か粉末のようなものが空中に飛び散り、赤い光を放つ粉塵となる。

「風霊よ！　炎を喰らいて灼熱の疾風となれ！」

少女が左の翼を振り抜く。

赤い粉塵が少女の起こした風で吹き飛ばされるや否や、真紅の炎と化して岩の巨人を飲み込んだ。

まさに一瞬。巨体を誇った巨人は、それ以上に膨らんだ炎によって飲み込まれた。

肌を焼く熱風が閻太のところまで吹き付けてくる。

「炎……………？　マジかよ……………」

始まりが一瞬なら、終わりも一瞬だった。

火炎は岩の巨人と足元の草を焼いただけで、周囲に燃え広がることなく、数秒と経たずに鎮火した。熱風も収まり、周辺の涼やかな風が一気に吹き込んでくる。

巨人の表面は比喻ではなく完全な黒焦げになっていた。

少女は安堵した様子で、空になった試験管を腰布に差し直す。

ああも完全に焼き払われては、二度と動きはしないだろう。何も

理解していない閻太ですらそう思っていた。

だが 岩の巨人は動いた。

「そんな！」

巨人は焼け焦げた右腕を振り上げて、力任せに地面へ叩き込む。地面が割れんばかりの衝撃と土砂が巻き上がり、閻太と少女を吹き飛ばす。

「きゃあっ！」

「ぐっつ……！」

あれだけ大きな岩塊が落下したのだ。直撃こそしなかったものの、余波だけでも充分すぎる破壊力を帯びていた。

閻太は地面を散々転がされた拳句、何か固いものにぶつかってようやく止まった。

「冗談じゃねえぞ、おい！」

全身の痛みを堪えて顔を上げる。もうもつと立ち込める土埃の向こうに、閻太と同じく必死に起き上がるうとする少女の姿があった。岩の巨人は、前身を黒焦げにされたことなどまるで意に介さず、鈍重な動作で歩き出そうとしている。

「ちくしょう……怨むぞ」

誰に対するものか判然としない恨み言を口にする。

閻太は立とうとした直前に、自分がぶつかった物体に目を落とす。た。

長方形の大きなケース。狐ヶ崎に持たされていた代物だ。

「身の危険を感じたら開けろって言ってたよな……」

閻太は藁にも縋る気持ちでケースの蓋を開けた。ここまで状況が悪化した以上、もはやどうしようもないかもしれないが、万が一ということもある。

幅一メートル超のケースの内側は、いかにも上等そうな緩衝材が敷き詰められていた。

そして、緩衝材に保護された銀色の

「これは 剣？」

幅広かつ肉厚の刀身に、両手で充分に握り込める長さの柄。鏢から峰の根元付近にかけて、普通の刀剣にはありえない装置らしきものが取り付けられていた。

刀身は途中まで片刃だが、先端に近づくにつれて少しずつ両刃に変わっている。

確かこういう形状の日本刀があったはずだ。切先両刃造という技法だったか。しかし、日本刀にしては刀身が幅広で唾がない。柄も近代的な形状で、どちらかといえばグリップとでも呼ぶべきだろう。唾から峰の根元にかけての装置に至っては存在意義すら分からない。

ただの出っ張りのようにも見えるが、指を引っ掛けて開閉や稼働をさせられそうな部分が幾つもある。

何よりも特筆すべきは、柄や刀身、そして意味不明の装置に至るまで、全てが銀色で統一されていることだ。

「これでどうにかなるのか……？」

閻太は取り除き切れない疑念を抱きながら、剣の柄を握り締めた。

第3話「発端は自業自得」

「これでどうにかなるのか……？」

閻太は取り除き切れない疑念を抱きながら、剣の柄を握り締めた。自転車のグリップの形を直方体に変えたような手触りだ。確かに硬くはあるのだが、程よい弾力もあって、不思議なくらいに握り心地がいい。

閻太は意を決して剣を持ち上げた。

「おっ……」

想像していたよりも遥かに軽い。見るからに重そうな外見とは裏腹に、片手でも十分に把持できる程度の重量だ。

閻太は右手で柄を持ったまま、色々と角度を変えて剣の外観を観察する。

柄も刀身の付け根の装置も刃も銀一色。その中で、肉厚で幅広の刀身だけは比較的白っぽい色合いをしている。

「……って！　こんなのじゃどうしようもないだろ！」

岩の巨人が前腕に重心を移動させ、身体中の岩石を軋ませながら前進していく。

一歩進むごとに地面が揺れ、岩石の隙間から土砂が零れ落ちる。あれだけの大質量が動き続けているのだ。城壁の内側にも間違はなく振動が伝わっているはずだが、城門は硬く閉ざされたままで、一向に開く気配がない。

「誰も出てこないなんて、ここには警察とか居ないのかよ……！」

あんな滅茶苦茶な奴が暴れてるんだぞ！」

「ここは同盟管理区域なのよ。警吏は役に立たないわ」

翼腕の少女が、閻太と岩の巨人の間に立つ。

「同め……？ 何だよ、それ」

少女は閻太の疑問に答えなかった。

淡色だった衣は土と泥に汚れ、伸ばしたままの左腕の翼には砂と小石がこびり付いている。閻太よりも遥かに痛々しい有様であるが、それでもなお、少女はあの巨人に立ち向かおうとしているのだ。

折り畳まれた右の翼が、腰布のホルダーから更に二本の試験管を抜き取る。

一本は青い粉末、もう一本には薄水色の粉末。どちらも先ほどの赤い粉末が入った試験管と同様に、砕かれた宝石のような輝きを放っていた。

「おい！ まだやる気なのかよ！」

「当たり前でしょう。ここを護るのは、私の使命なんだから！」

少女は試験管を掴んだ右翼を振り抜き、二色の粉末を撒き散らした。少女の眼前に青と薄水色の粉塵が舞う。

「風霊 よ！ 氷水を喰らいて凍結の旋風となれ！」

左の翼が羽ばたいた瞬間、極低温の風が猛烈な勢いで岩の巨人に吹き付ける。

旋風の中、巨人の足元の地面が氷に覆われたと思うと、地表に接していた腕と脚までもが瞬く間に凍りついた。

「凄え……」

胴体こそ薄い氷と霜が張っている程度だが、四肢を包む氷はかなり分厚い。

岩の巨人はどうかして凍結の拘束から逃れようと試みているようだ。流石の巨人でも両腕と両脚をまとめて固められてはどうしようもないはずだ。

本音を言えば、どうしようもなくなってくれなければ困る。

狐ヶ崎が用意してくれた道具は、あの巨体に対して無力としか思えない代物だ。

こんな剣一本で巨人に挑むなんて正気の沙汰ではない。

情けない話だが、少女が使う魔法のような不可思議な力に頼る以外に、この場を切り抜ける方法が考え付かなかった。

しかし、岩の巨人の拘束に成功したにも関わらず、翼腕の少女は依然として険しい表情を緩めなかった。

「しまった……」

「おい、しまったって……！」

少女の返事を待つこともなく、その理由はすぐに明らかになった。岩の巨人が片腕に体重を掛けるや否や、熱い氷壁に閉じ込められていたその腕が、凍結箇所と無事な箇所の間目付近でへし折れたのだ。

「折れたっ！」

「違う、自分で切り離れたのよ！」

巨人の身体は大小の岩石によって構成されている。それらを一体

どのように繋ぎ止めているのかは閻太の知るところではないが、その繋がりを巨人の判断で断てるなら、任意の箇所を自在に切り離すことができてもおかしくはない。

短くなつた腕が地面に叩きつけられる。

「くっ！」

先ほどの一撃と比べれば微弱な振動だったが、それでも凄まじいことに変わりはなく、少女が体勢を崩して倒れかける。

閻太は咄嗟に剣を地面に突き刺し、倒れかけた華奢な身体を受け止めた。

「あ……」

細い

肘から先の翼が印象的過ぎて、いつの間にか少女に対して『膨らんだ』イメージを抱いてしまっていた。

しかし実態はこうだ。華奢という表現が痛々しいほどに相応しい。二の腕も肩も折れてしまいそうなくらいに細く、片手で支えられそうなくらいに軽い。

突然、閻太の頭に行き場のない怒りが湧き上がってきた。

「何で　こんな　」

こんな少女が巨大すぎる化け物に立ち向かっている。それを許せなく感じたのだ。

自分の弱さと不甲斐なさは痛いほど理解している。けれど、そんな理屈ではこの感情の高まりを抑えることはできなかつた。

「同盟だの管理区だの知らないけど！　頼むから無茶すんな！」

「管理区域を知らない？ それじゃ、あなたはやっぱり」

少女が二の腕を掴まれたまま振り返る。

ところが、突如として驚きの表情を浮かべたかと思うと、視線をゆっくりと下げていく。

「まさか…… 霊装！」

「え？ 何だよいきなり」

少女の視線は、地面に突き立てられた剣に向けられていた。

人間相手ならともかく、あの巨体に対しては表面を削れるかどうかも怪しい代物だ。象に鼠が噛み付いても象を倒すことはできないだろう。

「 霊装 ならどうにかなるかも……貸して！」

少女は閻太の手を振り解き、銀色の剣を引き抜いて駆け出そうとした。しかし、数歩も走らないうちに足を纏れさせて、地面に膝を突いてしまう。

「痛っ……」

それでも少女は、剣を杖に立ち上がろうとする。

肌蹴た衣の裾から、編み上げサンダルのような靴を履いた細い足が覗く。腕とは違って脚は普通の人間と同じ姿形をしていた。

閻太は、その白い肌から滲み出る赤い血を見逃さなかった。

「お前、怪我してるじゃないか」

巨人が地面を殴りつけたときに負傷したのだろう。振動で倒れか

けたのも、足を縛れさせて転倒したのも、あの傷のせいに違いない。

「大丈夫……これくらい……！」

岩の巨人が残された片腕を自切し、遂に上半身の自由を得る。更に、長さが半分ほどになった腕を支えにして、両脚までも氷の戒めから逃れさせようとする。このままでは、完全に抜け出されるのも時間の問題だ。

少女が岩の巨人を睨む。閻太はその背中を見て、硬く拳を握り締めた。

ああ、駄目だ。

こんな姿を見せられたら、嫌でも『あいつ』と重ねてしまう

「貸せっ！」

「あっ………！」

閻太は少女から剣を奪い取り、放置していた空ケースに駆け寄った。

狐ヶ崎はこれの使い方をケースの中に入れておいたと言っていた。今更こんな剣の使い方が分かったところで無意味かもしれないが、何もしないよりは遥かにマシだ。

それに、あの少女はこの剣なら何とかなるかもしれないと言っていた。

「使い方は……これか！」

蓋の内側に差し込まれていた八つ折りの紙を広げる。日本語とアルファベット、それに見たこともない文字で記された説明書きに加え、操作手順らしきものを示す白黒のイラストが添えられていた。

少女が閻太の肩越しに説明書きを覗き込む。

「精霊符 は持つてる？ 私一枚だけなら用意があるけど、あれを倒しきるにはもう一枚くらいあれば確実かも」

そう言って、少女は板状のものを差し出した。

閻太は間違はなくそれに見覚えがあった。金属で縁取りされた透明な板の狭間に、赤い宝石の破片のような物質が詰まった物体

「まさか……」

スラックスのポケットから、ここに来る直前に狐ヶ崎から受け取った アクリル製品 の完成品を取り出し、少女の言う 精霊符 なる板と見比べる。

両者は明らかに酷似していた。少女が持っていた方には凝った意匠の刻印が刻まれているのに対して、狐ヶ崎から受け取った方は無地だというのが唯一の相違点である。

「うちの会社は何を扱ってたんだよ、社長……」

この場にはいない人間に愚痴を溢す。

試験管 つまり ガラス製品 は少女によって魔法のような使い方とされていた。ならば アクリル製品 も同じことなのだろうか。

巨人が両脚を半ばから切り離し、下半身を氷の拘束から解き放った。

短くなった四肢が地面に触れた途端、断面から樹木の根らしきものが溢れ出し、大地に食い込んでいく。

驚く閻太に対して、少女が状況を解説する。

「あれは表面の岩石じゃなくて、内側に潜む植物が本体よ。どれだけ岩石の部分を砕いても、本体が無事なら大地から材料を調達して外殻を復元してしまう。岩は鎧に過ぎない。活動の中心はあくまで植物の方なの」

「……要するに外を壊しても無駄ってことか？」

受け入れ難い理屈であることには変わりないが、主旨は辛うじて理解できる。

そういえば、少女は再ほど『構成が 岩 で駆動は 樹 』などと言っていた。炎を浴びせたのも、内部の植物を焼くための行動だったのだろう。

「火霊の精霊符 が二枚もあるなら、あれくらい焼き払えるはず。岩の隙間に剣を突き刺して全開放すれば……」

「一気に色々言っちなよ！ まずは……こうか！」

柄から峰の根元に掛けて取付けられた装置には、薄い板状のものを挿入するためのスリットが三つ並んでいる。閻太はそのうちの二つに 精霊符 とやらを差し込んだ。

「……何も起こらないぞ」

「そんなはずは……もっと強く押してみて」

少女に促されるまま、掌底で 精霊符 を押し込む。
がちり、という鈍い音。

一瞬の間を置いて、凄まじい熱風が刀身の周りに吹き荒れた。

「うわっ！」

刀身が瞬く間に白熱していく。

白銀に近かった刃がより一層白く輝き、高温の光を放ち始める。

「……熱っ！」

ちりちりと焼けるような痛みが肌を刺激する。その不快感に耐えかねて、閻太は思わず柄から片手を離れた。

焼けた切先が草原に突き刺さる。

途端に地表を覆う草が燃え上がり、閻太の足元を炎で染め上げた。

「ほんとに熱くなってるのか……」

「私の 精霊術 では表面を焦がすことしかできなかった。だけどその武器なら、きつと」

「どうにかできるんだな」

閻太は両手で剣を抜き取り、岩の巨人に向き直った。

巨人が地面から右腕を引き抜いた。自ら破壊したはずの腕が殆ど元に戻っている。最初と比べると大岩よりも細々とした岩の割合が多く、それらの隙間を土が埋め、表面を植物の根が血管のように這っていた。

少女の言つとおりあれは修復行為だ。このまま放っておいたら、四肢全てを復元されてしまうだろう。

駆け出そうとする閻太の肩を少女が掴む。

「これだけは教えて。あなたはこの町の人じゃない。なのに、どうして同盟管理区域なんかを護ろうとするの？」

「だから専門用語ばっか使われても分かんねえよ！ ただ……」

閻太は少女を一瞥して、すぐに顔を背けた。

「……放つとけないだろ」

岩の巨人は相変わらず閻太の存在など気にも留めず、目の前の城壁へ近付こうとしている。

閻太は少女の手を振り解き、岩の巨人に向かって走り出した。しかし持ち慣れない剣を構えたまま走るのは難しく、自然と切先を引きずってしまふ。

切先が地表を擦る軌跡が、火の線となって閻太の後ろに刻まれていく。

「ったく、どうしてこんなことになったんだか」

走り続けながら考える。何故こんな状況に巻き込まれてしまったのだろう。

それは狐ヶ崎の誘いを不用意に受けてしまったから。

那美の注意に従わず城門から離れてしまったから。

あの少女の警告を無視して逃げようとしなかったから。

「なんだ、全部自分のせいじゃねえか」

知らず知らずのうちに口の端が持ち上がる。巻き込まれてしまったのは自業自得。誰のせいでもない。選んだのも動いたのも動かなかったのも閻太自身。誰も強制などしていない。

それなら

「それなら、自分でなんとかしないとな！」

岩の巨人が右腕を地面に突く。どう足掻いても頭や胸には届かない。狙うとすれば四肢以外にないだろう。

横殴りに剣を振るい、無防備な右手首に刃を叩き込む。技量も力もあつたものではない素人の一撃だったが、辛うじて岩石と岩石の

間に食い込ませることはできた。

腰を入れて剣を押し込み、土くれに刀身の殆どを埋没させる。

剣の周辺の土が加熱されて焦げ付き、根が黒煙を上げて炭化する。それでも岩の巨人は全く堪えず、地面から左腕を悠々と引き抜いていく。

全開放　それをすれば巨人を倒せるかもしれないと、あの少女は言っていた。

言葉の意味は分からないが、やり方だけは説明書きを読んで把握している。

「こいつで、どうだ！」

閻太は　精霊符　を挿入した鏢の装置を右手で掴み、刀身側に向かってスライドさせた。

内部で機構の動く音が鳴り響く。

その瞬間、閻太を凄まじい熱波が襲った。

一瞬にして意識が茹で上がり、意識が遠退く。それでも、閻太は剣の柄を固く握ったまま離そうとしなかった。

「ぐっつ……！」

白熱する刀身から猛烈な光が迸り、巨人の右手が内側から真っ赤に発光する。

数秒と経たないうちに灼熱の波動が右腕を逆流し、岩石を融解させ木の根を焼き払う。高熱の伝播は腕部に留まらない。肩を、頭部を、胸部を次々を赤く焼き焦がしていく。

巨人の胸に亀裂が走り、内部から炎が噴出した。

崩れていく岩の巨人。閻太はそれを薄れ行く意識の中で見届けていた。

だから私は反対したんです！

ん、こうなるが分かっていたとでも言いたげだな

危険性は充分にありました！　ここは管理区域なんですよ！
戦争の遺物がろくに取り除かれていないのは知っているでし
よう！

知ってるよ。だからこいつを誘ったんだ。久々に素質のある材を
見つけられたからな

……！　あなたという人は……。彼はただの高校生で……

素質というのは身体的な能力を指すわけじゃない。

いざってときに出てくる性根のことだ。こいつは充分に合格だよ

しかし、彼がまた仕事を請けるとは限りませんよ。

請けるさ。必ず請ける。何なら賭けでもしようか？

「あ」

目を覚ましたとき、そこには剣ヶ峰商会の事務所の天井が広がっていた。

閻太は何秒か考え込んでから、ばねのように身を起こした。

「どうして、ここに……」

胡乱な頭で辺りを見渡してみる。二つしかないデスクに、壁際に並べられた書類入れの棚。そして一对の来客用ソファ。そのうち一つは閻太が横たわっていたものだ。どれも普段と何も変わらない。

窓の外から差し込む光は夕焼けの陽光になっていた。

どれくらいの時間を『あちら』で過ごしたのかは定かではないが、おおよそ一時間から二時間は経過しているだろうか。

「夢……いや、そんなはずは……」

気を失う前のことは克明に覚えている。

両手と顔面に吹き付ける灼熱の熱風。白熱した刀身。融解し沸騰する岩石。焼け崩れる岩の巨人。視覚だけではなく全身の触覚と痛覚に刻み込まれた記憶だ。

閻太は手に視線を落とした。冷たく湿ったタオルが両手に巻き付けられている。

軽度の火傷でも負ったようで、手の甲に軽い疼くような痛みがある。手の平に痛みがないのは、きつと柄を握っていて熱風に晒されなかったからだろう。

「帰ってきた……のか」

「よかった、気が付いた？」

事務室の入り口で、乱場那美が紙袋を抱えて佇んでいた。袋には近所のドラッグストアの商号が印刷されている。

「乱場さん……俺は……」

「……あれは夢じゃないわ」

那美は応接用の机に紙袋の中身を出した。火傷用の軟膏に包帯のロール。閻太の手当てのために調達してきたらしい。

「疑問に思うであろうことを先に教えておくわね。社長はまだあちら側にいるわ。私と君だけが先に戻ってきたの。正確には、気を失った君を私が連れて帰ったという形になるけど」

「あ、ありがとうございます」

「こちらが謝らないといけなくらいよ。社長の我俣に付き合わせただから」

咄嗟に礼を言うと、那美は哀しげに微笑んで首を横に振った。

細い指で軟膏を取り、閻太の手に優しく塗り込んでいく。

先ほどから姿の見えない狐ヶ崎の行方もそうだが、もっと訊ねたことがたくさんあった。翼腕の少女。魔法のような力。あんな商品を売っている理由。あの世界そのもの。分からないことが多い。分らないことが多過ぎて、何から訊けばいいのか判断できない。

「……あの 世界 は一体……何なんですか」

那美は暫く沈黙してから、ぼつりぼつりと離し始める。

「ごめんなさい。今の君にはもう一つの 世界 としか答えられない。もしも、君が本格的にこちらの仕事に関わるといふなら、必要なことは全て教えるつもりだけど……」

そして、閻太の瞳を真つ直ぐに見据える。

「私は、できることなら君には関わって欲しくないと思ってる」

閻太は何も言うことができなかった。那美の眼差しはどこまでも真摯で、他意をまるで感じさせなかったのだ。閻太を排除したいという打算的な悪意ではなく、危険な領域に足を踏み込んで欲しくないという純粹な善意 或いは悲哀。

腕翼の少女がどうなったのか訊ねたいという思いはあったが、珍しく感情を露わにした那美を前にすると、これ以上の問いをぶつけることができなくなってしまふ。

そんな閻太の煩悶を悟ったのか、那美は立ち上がってデスクに向かいながら、さり気なく口を開く。

「シナト。それが君と一緒にいた女の名前よ」

「……しなと」

教えられた名前を復唱する。

不思議な響きだ。けれど、あの少女にとてもよく似合う名前だと感じられる。

「今日の給金は約束どおり支払うけど、これから先も継続するかど

うかは、しっかり考えてから決めなさい」

那美は卓上に一通の封筒を置いた。

しかし、閻太は那美の顔から目を逸らすことができなかった。

「この決断は君の人生を変える　そのつもりでね」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6013x/>

異世界アルバイト！

2011年10月19日08時18分発行